資料１

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること

（案）

令和　　年　　月　　日

飯塚市文化施設活用検討委員会

はじめに

1931（昭和 6）年、前身の劇場が火災、台風という不運が重なり倒壊した中にあって、この地に根付いた劇場文化の灯を絶やすまいと、江戸時代の歌舞伎様式を伝える木造 2 階建ての芝居小屋が飯塚の地に再建されました。嘉穂劇場です。

以降 90 年もの間、途切れることなく運営を続け、その間 2003（平成 15）年 7 月の大水害で壊滅的な被害を受けるも、多くの芸能人や地域の人々に支えられ復興した嘉穂劇場でしたが、2019（令和元）年末に全世界で発生した新型コロナウイルス感染症は多くの演劇や音楽イベントを中止に追いやり、嘉穂劇場もやむなく 2021（令和 3）年 5 月に運営母体の NPO 法人嘉穂劇場が解散し、休館せざるを得ない状況になりました。

2021（令和 3）年 9 月に飯塚市が NPO 法人嘉穂劇場から贈与を受けた嘉穂劇場について、今後とも魅力ある施設として活用するための方策等について審議をすべく、飯塚市文化施設活用検討委員会（以下「活用検討委員会」）は 2022（令和 4）年 3 月 23 日に飯塚市教育委員会から「嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること」の諮問を受けました。

これを受け、2023（令和 5）年 1 月 30 日まで 8 回にわたる活用検討委員会開催によって各種基本情報を得ながら委員で審議を重ね、その結果を取りまとめましたので、ここに答申いたします。

なお、活用検討委員会では毎回それぞれ専門の立場から活発な議論が交わされ、本答申に記載した内容以外にも様々な提案や指摘があったところです。このため、答申書には答申に至る協議の内容やその背景となる考え方なども整理して記載しております。嘉穂劇場の再開に当たっては、協議を重ねてきた内容にも十分配慮いただき、具体化に取り組んでいただきたいと思っております。

今回の検討委員会の議論の中で、嘉穂劇場は改めて飯塚を含む筑豊の歴史を物語るだけでなく、ノスタルジックな雰囲気が逆に多くの人々の共感を生み、現代に新しい形で歴史や文化芸術を発信することのできる、飯塚市の貴重な財産であることを確認しました。

嘉穂劇場が再開した暁には、劇場の多様な活用によって地域の中核的施設となり、地域の賑わいを創造するとともに、市民をはじめ演者の方々や海外の方々からも愛され、親しまれる劇場となっていくことを心から願っております。

Ⅰ　答申

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること (1) 嘉穂劇場の文化財としての価値を損なうことなく、地域経済の活性化に寄与する活用方策について

1931（昭和 6）年に建造された嘉穂劇場は、石炭により繁栄した筑豊の歴史と、そこで生きてきた人々の暮らしや文化を今に伝える貴重な建造物です。明治期から昭和初期にかけて、遠賀川流域一帯には約 50 もの劇場が開設されたようですが、今日まで残る劇場は嘉穂劇場だけであり、室内においても当時の意匠や舞台機構が保存継承されています。このことにより、嘉穂劇場は 2006（平成 18）年に国登録有形文化財となりました。

このような文化財的な評価に加え、芝居小屋としても国内に現存する芝居小屋の中では最も規模が大きく、時代の変化を受けつつも 90 年もの間形を変えることなく運営が継続された唯一の劇場であり、現存する芝居小屋の中でも際立った特徴を持つ、評価の高い劇場です。

このように希少性が高く、この地の歴史を語ることができる嘉穂劇場は、本市を特徴づける貴重な財産、強みとしてこれからも活用していくことで、人々の交流を生み、経済活動を活発にし、地域の賑わいを創造することができると考えます。

かつて嘉穂劇場は人々が楽しみを求めて集まる場所、娯楽の殿堂でした。嘉穂劇場が時代を超えてこれからも人々の出会いと感動をもたらすことのできる施設として多くの人々から愛される施設であるよう、その活用の方策として、以下のとおり嘉穂劇場に 4 つの性格を持たせることを提案します。

●今後とも劇場としての性格を持ち続けていくこと
●劇場として使用しない時には、多目的公共施設としての性格を持つこと
●観光資源として機能する施設としての性格を持つこと
●文化財としての価値、性格を持ち続けていくこと

時代を超えて今に残る嘉穂劇場が、これまでの公演内容や利用のしかたにとらわれることなく、新たなエンターテインメントを提供し、飯塚市の文化芸術の振興に欠かせない施設として、長く愛されていくことを期待しています。

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること
(2) 嘉穂劇場と飯塚市文化会館をはじめとする文化施設や周辺商業施設との連携による活用方針について

嘉穂劇場は中心市街地に位置し、周辺には飯塚市文化施設「イイヅカコスモスコモン（以下「コスモスコモン」）や図書館、公民館、男女共同参画推進センターを併設するイイヅカコミュニティセンターが立地するなど、飯塚市民の文化活動と知的好奇心を満たすエリアに位置しています。さらに、周辺には江戸時代の長崎街道の飯塚宿跡が存在し、寺院や史跡などが数多く残る場所でもあります。

近年、実施された中心市街地活性化事業によって、居住機能と多様な都市機能を集積させるコンパクトなまちづくりを展開した結果、中心市街地の居住者は増加し人々の往来も徐々に増加していましたが、2019（令和元）年末に発生した新型コロナウイルス感染症の影響によって、人々の往来とふれあいの機会は大きく減少し、ウィズコロナ政策によって、徐々に人々の交流機会は増加してきているものの、中心商店街の人通りはまだまだ以前のようには回復していません。

一方で、生活に様々な制約が求められるコロナ禍にあって、人々に心の安らぎや明日への希望を与えてくれるものは文化や芸術であることも、改めて確認することができました。飯塚市にコスモスコモンと嘉穂劇場が近接立地していることは、飯塚市の強みであり財産です。この両者について、「コスモスコモンは市民の文化に触れるすそ野を広げる役割をもつ施設として、一方、嘉穂劇場は他にはない飯塚の『とんがった（文化・芸能の）魅力』を引き出す施設として」役割・性格を整理し、両者が連携を図っていくことが本市の文化振興の発展、地域の活性化に大いに寄与するものであると考えます。

さて、飯塚市内には令和 4 年 11 月にオープンした大型農産物直売所「カホテラス」や令和 5 年夏の「ゆめタウン」開業によって、交流人口が大きく増加する明るい兆しが見えています。地域経済の活性化においては、これら増加する交流人口を「点」で存在する各施設だけで受け止めるのではなく、市内の商業・観光施設と結びつけ、市域全体で本市を訪れる人々を楽しませる要素を様々に持ち合わせていくことが求められます。

そのような中、嘉穂劇場はその役割を大いに担うことができる施設です。嘉穂劇場の持つ特性を生かし、他の劇場等では見られない公演の演出による人々の集客にとど

まらず、公演以外の場面でも嘉穂劇場で楽しんでいただき、今後さらに周辺の文化施設や商業施設との連携によって地域に賑わいをつくるために嘉穂劇場をどう活かしていくか、具体的提案を以下のとおり示します。

- 劇場内の施設設備等で文化財として保存する部分と劇場運営のために快適性を求める部分や用途を広げる必要がある部分は整理・改善し、新たな演者、利用者等を獲得できる施設へと変化
- 地域の歴史を背景に、創業者が演者等とともに築いてきた嘉穂劇場の歴史や舞台機構をはじめとする設備等の意味を理解してもらうなど、ストーリー性を際立たせた劇場の公開（劇場内に残る小道具やポスター等の魅力的な展示を含む）
- 嘉穂劇場に行かなければ出会えない、ユニークなヒト、モノを地域で発掘
  （ユニークなボランティア解説者の養成、新たなお土産の開発　など）
- 周辺の店舗等を巻き込み、多くの人々に自慢したくなるような劇場体験プランの提供
- 劇場前広場（現駐車場）の有効活用により、賑わいや交流の場を創出
- Web や SNS、紙媒体など活用して発信力を強化するとともに、利用した人が発信したくなるイベント等の企画・開催

さらに、中心市街地にある劇場としての性格を持つ嘉穂劇場が、地域の賑わいづくりに役割を果たすこととして、平日の賑わいをいかにつくることができるかについても重要になってきます。

そのためには、嘉穂劇場やコスモスコモンのある中心商店街の商業エリアにおいて、まちの賑わいづくりのためにイメージするゴールを多くの関係者が共有し、それぞれの連携で何ができるか、またそれぞれが何ができるかなど早期に協議していくことが重要です。同じベクトルのもとで、嘉穂劇場からの発信にとどまらず、周辺商店街、各店舗それぞれが魅力を発揮するとともに、一体となってこの地域の明確な特色やワクワク感を発信できるエリアとなることが求められます。

まとめ

これまでの活用検討委員会で、これからの嘉穂劇場が将来にわたって愛され利用される劇場として存在していくために、劇場利用者として繰り返し語られていた対象者は「子どもたち」でした。

これからの嘉穂劇場に期待するイメージとして、活用検討委員会では「市民」、「子ども」、「演者」、「外国人」それぞれに、どのように映る劇場であってほしいかを整理しましたが、その中でも特に「子どもたち」に劇場のことを知ってもらい、利用してもらい、そして大切に思ってもらうことが今後の劇場の存続において重要であるという認識に立ったところです。

子どもたちがこの劇場で筑豊の歴史や文化芸術を学び、親しみ、表現することの楽しさに触れる機会を持つことは、子どもたちの豊かな感性を育むだけでなく、郷土に対する愛着や誇りを育むことにつながり、ひいてはグローバル社会で活躍する際の心のよりどころとなっていくものです。

一方、嘉穂劇場には、今後とも多くの人々の心のよりどころとして記憶に深く残り、また交流を生む場所として残っていくために、伝統的な部分と革新的なものとを備えた劇場としての魅力を発信しつづけることが求められます。

嘉穂劇場でなければ体感できない古さと新しさを兼ね備え、進化し続ける『娯楽の殿堂』として、これからも地域で愛され利用される劇場であることを願ってやみません。

Ⅱ　答申に至る協議・考え方の整理

1　嘉穂劇場の評価

(1) 文化財、芝居小屋としての評価

国登録有形文化財の嘉穂劇場について、活用検討委員会委員が共通認識をもって今後の活用方策について検討するため、活用検討委員会では、まず嘉穂劇場とはどんな施設であるか、90 年の歴史を持つ劇場の価値・評価等を明らかにする作業から始めました。

文化財としての評価、芝居小屋としての評価を下記のとおりまとめています。

① 文化財としての評価

- 2006（平成 18）年 11 月 29 日、福岡県 42 番目の国登録有形文化財に。
- 「国土の歴史的景観に寄与する」嘉穂劇場としての評価をうける。
- 1931（昭和 6）年に建てられた木造 2 階建ての芝居小屋で、明治期から昭和初期に筑豊地方につくられた劇場建築で唯一の遺構（希少性の評価）。
- 建設当初の外観及び室内意匠と建築構造、そして芝居小屋の機能が現在に保存・継承されている（文化財の完全性）。
- 近代の建築技術を組み合わせて、屋根を軽量化させて収容人数を上げた劇場建築であることも評価。
- 文化財としての価値を保ちながら、活用を通して新たな価値を見出していくことがさらなる評価につながる。

② 芝居小屋としての評価

- 1880 年代の終わりごろから地方で爆発的に芝居小屋が増加し、筑豊には約 50 の劇場が開場。
- 歌舞伎に加え、新派や家庭劇、喜劇、新劇、寄席や舞踊など様々な演目が行われるようになり、みんなの嗜好が多様化した真っ只中に（1931（昭和 6）年）嘉穂劇場は建設される。
- 芝居小屋の建設は、その時代の最先端の技術を用い、演目も社会の嗜好を反映（文化の発信地）。
- 現存する芝居小屋の中で最も規模の大きい劇場。
- 映画専門館やテレビの登場によって、多くの芝居小屋が他の目的に転用されたり閉館した中で、1930 年代から劇場として途切れることなく運営されてきたことに非常に高い価値がある。

(2) 市民、関係者から見た評価

これまで嘉穂劇場の運営や利用に携わってこられた方々に、これまでの嘉穂劇場の評価とともに今後の嘉穂劇場はどうあるべきか、また嘉穂劇場に期待することなど伺い、今後、活用検討委員会で新たな活用策を審議する際の参考資料とするためにヒアリングを実施しました。概要は以下のとおりです。

① 対象者

嘉穂劇場をこれまで支援してこられた方、実際に嘉穂劇場を使用していた方、周辺商店街、周辺住民の方など　　18 人（団体）

② ヒアリング期間

2022（令和 4）年 5 月 30 日　～　2022（令和 4）年 7 月 8 日

③ ヒアリング内容

これまでの嘉穂劇場との関わり、嘉穂劇場に対する『評価』・『思い』、今後の嘉穂劇場に対する期待　　等

④ ヒアリング結果（抜粋）

下記のとおり

＜嘉穂劇場の評価＞

- ✓ 嘉穂劇場は桝席や花道などが存在する無二の劇場であり、飯塚市民のシンボルになり得るものである。嘉穂劇場の「不便さ」を含め、このままの形で残してほしい。
- ✓ 嘉穂劇場は小屋主との一体感を感じる場所であった。嘉穂劇場はここにしかない劇場である。
- ✓ 桝席についてはフラットになればさらに活用の範囲が広がるのでないか。
- ✓ 嘉穂劇場は、子どもたちの教育の場、発表の場としても貴重な存在である。
- ✓ 嘉穂劇場は利用料が高額であったため、演劇の会場としての利用を考えても、大道具を取扱う裏方の雇用経費が捻出できず、使いづらかった。
- ✓ 地元の商店街や地元住民においては、劇場との関わりが少なく、嘉穂劇場はどちらかといえば敷居の高い存在であった。

＜今後の嘉穂劇場に期待すること＞

- ✓ 大物の役者が定期的に使ってくれるような劇場になっていくことに加え、地域住民が利用できる施設であってほしい。
- ✓ 海外から人を呼びこむのに嘉穂劇場は身近で気軽に訪れ、文化に触れるこ

とができる施設としてもっと売り出したほうがよい。嘉穂劇場は観光資源としても必要な施設である。

- ✓ 劇場前の駐車場は広場など他の目的に使い、駐車場については周辺の民間事業者が経営する駐車場との連携を強化して確保すべき。
- ✓ 大型バスを利用する観光客の乗降場所は確保してほしい。
- ✓ 機材のデジタル化や映像による演出が可能になるような設備の導入、昭和40年代に整備された楽屋の改修を望む。
- ✓ これまで劇場と地域住民のつながりの歴史は残念ながらなかったが、今後施設を維持していくのであれば地域の人が嘉穂劇場をバックアップしていく体制が必要ではないか。
- ✓ 市民が利用しやすい劇場であるよう、営利と非営利とで料金設定を分けるなどの工夫があってもいいのではないか。

＜まちづくりの観点から＞

- ✓ （イベント開催時のアンケートで）嘉穂劇場の周りに店舗（食事処や土産物店等）がないのがネックとの回答あり。周辺のまちも盛り上がる企画が必要。
- ✓ 人流が増加することによって、空き店舗もお客様のニーズに合った店舗に変化していかなければならない。
- ✓ 劇場を保存することは簡単だが、維持して活用していくのは難しいことと思う。町内も世帯数が減少傾向にあり、隣組が機能しない場所も出てきた。町内としても、まちが元気になるような取り組みを期待する。
- ✓ 嘉穂劇場を単体で考えるのでなく、周辺部とが一体となって、まちで時間を過ごすことのできる空間づくり、賑わいづくりが必要である。
- ✓ 嘉穂劇場を核として文化を大切にする飯塚に愛着を持つ人が集まってくるまちづくりを進める必要がある。

これらのことから、嘉穂劇場の文化財としての評価と芝居小屋としての歴史、評価などを踏まえると、嘉穂劇場は本市の歴史を語り、文化的価値を生む、欠かせない施設であると捉えることができます。また、現存する芝居小屋の中では最も規模が大きく、希少性が高い施設であり、文化的にも地域経済的にも嘉穂劇場を核に本市に人を呼び込むことのできる可能性を持つ劇場であるということができ、嘉穂劇場は今後とも保存し、活用していくにふさわしい劇場であると考えます。

２　これからの嘉穂劇場が担っていく性格の整理

嘉穂劇場がこれまでに果たしてきた役割、そしてそれに伴う評価について、上記のとおり活用検討委員会内で共通認識に立ったのち、これからの嘉穂劇場が担っていく性格、期待する性格について協議し、次のとおり整理しました。

(1) これからの嘉穂劇場が担う性格

①劇場（芝居小屋）（文化施設）であること

- 演者に択ばれる施設であること
- 観覧者が楽しめる施設であること

②公共施設であること

- （施設の形態を生かした使い方であって、）文化施設・劇場として多目的に使える施設であること
- 障がいのある方にも配慮した施設であること
- 年齢を問わず、利用できる施設であること

③国内外の観光資源となり得るものであること

- 劇場空間を楽しむ仕掛けがあること
- 繰り返し訪問したくなる、あるいは訪問者が発信者となって新たな観光客を呼び込む仕掛けがあること
- 観光客を呼び込む仕組みが儲かる仕組みにつながるものであること

④文化財であること

- 創建時から今日までの形式・仕様（平面・構造・意匠等）を保存すること。万が一、活用に伴い部分的な変更が生じても、元の形に戻すことができること。
- 地域の歴史を学ぶ、地域の文化を学ぶことが可能であること

嘉穂劇場は、災害により一時的な閉館はあったものの、これまで 90 年間にわたって途絶えることなく運営されてきたという他に類を見ない特徴を持った劇場です。この劇場から発信されてきた娯楽や芸能が地域の人々の心の支えとなり、今日までその役割を果たしてきたことを考えると、この施設が今後とも**『劇場（※1）』としての性格**を持ち

続けていくことをこの施設の基本の性格とします。なお、ヒアリングしたほとんどの方々からは、現存のままの保存、利用を希望する声が聞かれました。

そのうえで、劇場として使用しない時には、劇場の特異性を生かした市民ホール、文化ホール、アートスペースとして、市民をはじめ、市外の方々にも活用が可能となる**多目的公共施設としての性格を持つ施設**として整理します。歴史を感じさせるユニークな嘉穂劇場を生かして、最先端技術や観光等に関する MICE（※2）の誘致も可能ではないかと考えます。

一方で、嘉穂劇場は日本文化、日本芸能を伝える素材が多く残る施設であり、昭和時代を懐かしむ日本人はもちろんのこと、日本文化に関心を持つ外国人にも十分受け入れられる施設です。劇場のユニークさに加え、劇場を取り巻く地域の歴史を学び、新しい「体験」ができる**観光資源として機能する施設**であることが、劇場活用の幅を広げ、さらに劇場利用者を増やすことにつながると考えます。

最後に、これからも嘉穂劇場は**文化財としての価値、性格**をこのまま引き継いでいくことを期待します。嘉穂劇場は「国土の歴史的景観に寄与しているもの」という登録基準を満たし、国の登録有形文化財（建造物）となっています。これは、石炭により繁栄した筑豊の歴史と、娯楽を楽しんだ人々の暮らしと文化を伝える建築が今なお飯塚に残り、地域の豊かな歴史的景観に寄与する存在として評価されたものです。

このことから嘉穂劇場は、これまでの地域文化や変遷を伝える施設にとどまらず、芝居小屋の機能をこれからも維持し、活用していくことによってこれからの新しい文化創造の歴史を刻んでいく施設であると位置づけます。建設当初の外観をはじめ、室内意匠や建築構造、そして芝居小屋の機能を今日まで維持し続けてきた嘉穂劇場は、これからも新たな活用策を積み上げていくことで、文化財としての歴史を重ねていくことができると考えます。

※1)劇場とは・・・観客を集めて芸能を上演して見せる場所。（一般社団法人日本劇場技術者連盟 HP より）

※2)MICE とは･･･企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨･研修旅行（Incentive Travel）、国際機関・団体、学会等が行う国際会議（Convention）、展示会・見本市、イベント（Exhibition/Event）の頭文字のことであり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称。（観光庁 HP より）

(2) 嘉穂劇場とコスモスコモンとの性格の整理

飯塚市の文化施設、観光資源において、上記の 4 つの性格をすべて持ち合わせる施設は嘉穂劇場以外にはありません。しかしながら、文化施設であり、公共施設である建物として、市内にはコスモスコモンが存在します。

これまでコスモスコモンと嘉穂劇場とのすみ分けについては、コスモスコモンが整備された当初、『嘉穂劇場はその存立の歴史と現状から、古典芸能・大衆芸能の専門劇場として、一方の市立文化ホールは、現代舞台文化に親しめるホールとして、つまり互いの施設は、車の両輪として飯塚市民の舞台文化を育み薦める場』（※）であると整理されていたようですが、これからは両者の役割を演目の整理にとどまらず、

『コスモスコモンは市民の文化に触れるすそ野を広げる役割をもつ施設として、一方、嘉穂劇場は他にはない飯塚の「とんがった（文化・芸能の）魅力」を引き出す施設』として役割・性格を整理し、両者の共存共栄が本市の文化振興の発展、地域の活性化に大いに寄与するものであると考えます。

3　これからの嘉穂劇場に期待されること（ターゲットと機能）

2 で整理したこれからの嘉穂劇場の持つ性格から、これまでの活用検討委員会の中で多くの委員がイメージした利用者を整理し、これからの嘉穂劇場に期待するイメージを下記の表現で整理しました。ただし、この作業は下記以外の利用者を排除しようとするものではなく、改めて嘉穂劇場の利用者を再確認することで、嘉穂劇場をさらに特徴づけ、これからも多くの方々に大切にされ愛される施設として存在するための目標として整理したものです。

- 市民が利用でき、市民が誇れる劇場に
- 子どもたち・家族が思い出を作り、子どもたち・家族に愛される劇場に
- 演者から択ばれ、繰り返し使ってもらえる劇場に
- 外国人にとって日本文化を体感でき、大きな興味を持ってもらえる劇場に

（※）飯塚文化連盟名誉会長小出氏寄稿『季刊高校演劇』（2013．4）より抜粋

４　嘉穂劇場と地域経済の活性化

嘉穂劇場と地域経済との関係性について、劇場としての視点と観光資源としての視点から整理します。

(1) 劇場としての嘉穂劇場と地域経済の活性化

現在の嘉穂劇場周辺の人通りを確認すると、昭和通りや東町商店街の人通りは減少傾向にあり、市内の他の商店街と比較してもこの傾向は顕著です。

劇場は、一般的に休日や夕方から興行が行われることが多く、平日昼間の利用は少ない傾向にあります。このため、ややもすると市内に賑わいをもたらすはずの中心市街地に、嘉穂劇場を中心とした空洞化が生じかねません。加えて、このまま嘉穂劇場の休館が続けば、劇場を含む中心市街地の賑わいは低下し、地域経済・地域の活力の低下は容易に想像することができます。

嘉穂劇場が立地する周辺地域に賑わいをもたらすためには、これから再開する嘉穂劇場を平日いかに利用していくかが問われます。それは、市民が日常的にどれくらい嘉穂劇場を使い続けていくか、嘉穂劇場を利用することでどれだけ心の豊かさを体感することができるかにかかっています。

一方で、令和４年11月には郊外に大型農産物直売所であるカホテラスがオープンし、令和５年夏には菰田堀池地区にゆめタウンが開設される予定となっています。これらの大型商業施設は飯塚市に交流人口を増加させ、消費活動を活発にさせるメリットを大いにもたらします。この人の流れをチャンスにかえていくためには、これら施設ではできないこと、例えば嘉穂劇場を中心としたイベントの定期開催によって、周辺エリアが一体となり商店街に賑わいをつくることも方策の一つと考えます。

かつて、嘉穂劇場では全国座長大会が開催されていた時に、商店街で役者の「お練り」が行われていました。お練りの実施は多くの関係団体が協力し、まちを盛り上げるという共通の目的のために実施されてきたものです。

これからも嘉穂劇場と周辺の商店街関係者、その他多くの関係者とがまちの賑わいづくりのためにイメージするゴールを共有するため、早期に関係者間で協議の場を持ち、多くの人が関わりながら、嘉穂劇場と周辺商店街のそれぞれが魅力を発揮し、それらの相乗効果で地域経済の活性化を図っていくことが重要です。

(2) 観光資源としての嘉穂劇場と地域経済の活性化

観光による消費はあらゆるサービスに及ぶため、地域経済への波及効果は大きなものがあります。嘉穂劇場は本市中心市街地に位置するとともに、周辺には江戸時代の長崎

街道の飯塚宿跡が存在し、史跡が残るエリアでもあります。このようなエリアで、飯塚市の文化・芸能の中心となる嘉穂劇場が中核的な施設として集客力を持つようになると、周辺の観光施設や商業施設との連携により大きな相乗効果、および経済的波及効果を発揮するだろうと予想できます。このため、さらに地域経済への波及効果を高めるためには、人々の滞在時間を長くする必要があります。

人々は、観光の際のエリア決めには芝居鑑賞や文化財、文化遺産の見学だけでなく、ショッピングや食事にも大きな関心を寄せます。嘉穂劇場の再開の際には周辺商店街でも人々が滞在・回遊し、時間も含めて消費できるような環境づくりが求められます。

飯塚市は、福岡市にも北九州市にも車で１時間以内で行ける位置にあるため、地理的に有利な条件も観光政策に生かすことができます。

飯塚市内宿泊による経済効果は勿論、他都市の宿泊観光客（国内外含む）に対しても劇場周辺での飲食・ショッピングや地域の強みを活かした体験プログラムなど数時間の滞在・周遊プランを提供することができれば、旅行消費額の向上につながり、地域経済への良好な影響を示していくことができると考えます。

５　再開のために取り組むべきこと

2、3 で整理した、これからの嘉穂劇場が担う性格と期待される役割を踏まえ、嘉穂劇場の再開に当たり、嘉穂劇場の有する文化的価値を損なうことなく、新たな活用により新たな価値を付加していくために考えるべき視点を以下の 5 項目に整理しました。

- 嘉穂劇場の合理的配慮の視点
- 多目的施設としての設備の工夫
- 舞台裏の整備など、演者から愛される施設となるために必要なこと
- 嘉穂劇場の運営を福岡市と北九州市などとの広域的な連携の視点で考えていくこと
- 再開まで市民等の嘉穂劇場に対する関心を高め、期待感をもってもらうための取り組みの継続実施

- ✓ 障がいのある方や正座のできない方に対する合理的配慮と江戸時代の歌舞伎様式をもつ芝居小屋の形をどこまで残していくか、この両者のバランスをどのようにとっていくか丁寧に考える必要がある。
- ✓ 今の施設に利用制限があるのであれば、より多くのイベントや企画に対応できるように、本体に傷つけない程度の簡易的な取り外し可能なものを用意するなど工夫があったほうがよい。また桝席は、見学の際には桝席を見てもらうが、使うときには用途によって木枠をはずすことができるなど工夫できないだろうか。
- ✓ 演者は手動の不便さも受け入れており、古き舞台機構は残していくべき。ただし、演者にとって舞台裏の快適さは必要なものとして、新しい機能を付加することを考えたほうがよい。
- ✓ 嘉穂劇場は、飯塚市が福岡市にも北九州市にも近い距離にあり、福岡市や北九州市の劇場と連携することで、それら施設とは異なった演出の同一演目を嘉穂劇場で開催することができ、興行者にとっても観覧者にとってもメリットがあると感じる。より広域的な連携の視点で劇場運営について考えると利用価値が高まる。
- ✓ 嘉穂劇場に対する関心を高めるためのアプローチは子どもたちに対しても必要で、子供たちに存在を知ってもらい、劇場の利用者として巻き込んでいく必要がある。また、市民にファンになってもらう取り組みは、再開前から行っていくべきであり、すぐにでも始められることである。

上記の視点を踏まえ、活用検討委員会として、劇場の再開のために今後取り組む必要があると考えられることを、以下のとおりいくつかの時間軸の中で検討する項目として整理しました。

(1) ハードの視点から

① 再開までに早期に取り組むこと

・劇場の安全対策～屋根の改修と耐震対策
・観覧に関するバリアフリーへの対応～桝席の改善
・劇場前駐車場の見直しと多目的スペース化
・必要な舞台設備の改修（照明、音響、機器のデジタル化　等）
・快適な観覧環境・見学環境の整備（空調機器の再整備、見学ルートの整備　等）

② 中期的な視点で取り組むこと

・劇場内の文化的価値を有する資料（小道具、ポスター、チケット等）の整理と展示

・障がいのある方への合理的配慮～劇場展示館を１階に

③ 長期的な視点で取り組むこと

・演者に喜んでもらえる施設であるための施設・設備改善（大道具の搬入の簡便さ、快適な楽屋の確保　等）

・周辺市街地と一体になって盛り上がりが醸成できる街並みや景観整備（ハード面）

(2)ソフト事業の視点から

① 開館までの期間に取り組むこと

・市民、外国人、子どもたちに対する情報発信の強化

・嘉穂劇場に対する関心を繋ぎとめるための各種イベントの開催（ワークショップ、講演会、劇場前広場を活用したイベント　等）

・費用をかけず広報できる手法等の検討（TV 企画の活用、全国に発信できるフリーペーパーの活用　等）

・かつての嘉穂劇場を支援、利用してくれていた演者等への近況報告

・運営管理の方法と市民参画のあり方についての検討、決定

・劇場経営をサポートするファンクラブの検討

・嘉穂劇場資料のアーカイブ化（劇場内の小道具、ポスター等含む）

・見学客、観光客を受け入れるソフト事業の準備（お土産・オリジナルグッズなどの商品開発、劇場案内の工夫（DVD 等の用意）等）*（中間報告に記載あり）*

② 現在実施している耐震診断調査の結果が「入場可能」の場合（工事着工前）に取り組むこと

・期日を決めての劇場（文化財）見学会の開催

③ 改修工事期間に取り組むこと

・期日を決めての工事見学会の開催

6　嘉穂劇場の新たな活用や再開に向けた様々な提案

これまでの活用検討委員会では、これからの嘉穂劇場にさらに多くの人々が訪れ、賑わいと交流を創出する空間として利用されるために取り組むこととして、各委員から様々な提案がなされました。ここにその一部を紹介します。

- ✓ 「シルク・ドゥ・ソレイユ」が嘉穂劇場でやれれば、とても面白い演出が可能なのではないか。嘉穂劇場は広さがあり、それが魅力である。
- ✓ e-スポーツを嘉穂劇場でやると話題になる。e-スポーツに限らず、何かの『聖地』を狙うことが大切ではないか。毎年必ず実施される『聖地づくり』が大切である。
- ✓ 歴史的な空間で、記念写真が撮れる場所として劇場を活用する。
- ✓ 再開した嘉穂劇場の運営に関して、大学生ボランティアも劇場運営のお手伝いができるのではないか。そうすることで、市内大学生にも嘉穂劇場を印象付けることができる。
- ✓ 若い大学生等の力を活用し、柔軟な発想で情報発信を。
- ✓ YouTube はビューアの獲得だけでなく、アーカイブとしても残していける。また一つの作品としてでも使うことができるため、汎用性が高い。このようなツールを活用していくべきである。
- ✓ Web の作成は、外国人に対する情報提供も意識する必要があるが、海外に向けた Web は特にデザイン性が重要であることを意識してほしい。また、やれるところからやってほしい。
- ✓ 劇場の駐車場にキッチンカーを配置してイベントを実施するなど、館内の見学・利用が不可能な時期であっても、駐車場を使って関心を繋いでいく、賑わいを作っていくことが大切である。
- ✓ 嘉穂劇場のライトアップなどは休館中でもできる取り組みである。現在、文化財のライトアップによる観光客誘致が各地でもみられている。
- ✓ 劇場にとどまらず、周辺商店街などでも広くのぼり旗を立てて、お客様を誘導するような取り組みがあったらいい。
- ✓ 嘉穂劇場周辺の駐車場や商店街と協力して、芸能人によるスプレーアート等の TV 企画を誘致することで、劇場の集客や認知度のアップが図れるのではないか。訪れた人の発信で拡散力のアップにもつながる。
- ✓ 公共施設となった嘉穂劇場が地域で大切にされ、残っていくためには、運営に市民が参画していくことが重要である。また、施設管理者は劇場運営そのものが「地域をつくる」という意識を市民と共有していくことが大切である。

7　嘉穂劇場再開の時期について

嘉穂劇場が休館して 1 年以上経過しました。2021（令和 3）年 9 月に飯塚市に贈与されましたが、90 年もの間現役で運営を続けてきた嘉穂劇場は老朽化が進み、再開に当たっては耐震補強をはじめ早期の安全対策の取り組みが必要な状況となっています。

現在、飯塚市教育委員会では劇場の耐震調査及び耐震補強計画案の作成を 2024（令和 6）年 2 月末までの予定で実施しています。

本格的な改修工事はその後に着手されることを考えれば、少なくとも再開までには 2～3 年かかると見込まれますが、すでに休館して 1 年以上が経過しており、利用できない期間が長期にわたることを大変危惧しています。周辺に様々な施設ができ、利用者も新たな施設へと流れるだけでなく、市民の嘉穂劇場に対する思いも薄れ、嘉穂劇場の存在を忘れられないか大変気がかりです。段階的に開場することも含め、少しでも嘉穂劇場の再開を早める方法を模索していくことを要望します。

推敲中

結びに（第８回検討委員会での意見を受けて再検討）

かつて休館していた芝居小屋で再興を果たした施設に、内子座（愛媛県）や八千代座（熊本県）があります。これらの芝居小屋と嘉穂劇場との大きな違いは、内子座や八千代座が株主を募り、多くの有志で経営してきた施設であったのに対し、嘉穂劇場は長い間個人経営主が演者との大きな信頼関係を築きながら経営してきた点にあります。このため、演者にとって嘉穂劇場は経営主との深い人間関係の構築のもとで思い入れのある劇場として、これまで多くの芸能人に愛されてきたものと考えます。

このような嘉穂劇場の特性は、一方でこれからの劇場にとっては課題の一つとして捉えることができます。

嘉穂劇場は今後「公共施設」として管理運営されていきます。市民から大切にされ、気軽に利用される劇場となっていかなければなりません。また、飯塚市に残る文化財施設として、今後も保存活用し、市民の心のよりどころとなっていく施設となっていかなければなりません。

すなわち、今後、どれだけの市民が嘉穂劇場を「自分事」として捉え、主体的、持続的に劇場運営に関わってくれるか、そしてそのような市民とともに歩んでいくことができるかが、嘉穂劇場の未来に大きく関わっています。

市民の劇場運営に関わるあり方は様々です。再開までの間、あらゆる手法を用いて市民が嘉穂劇場に触れ、積極的に関わる場面をつくり、嘉穂劇場にふさわしい市民参画のあり方を探っていく必要があると考えます。

１年以上の休館が続く中、早期の再開を望む声が多い嘉穂劇場について、劇場として再開するための議論は勿論ですが、この議論を通じて市民、地域企業等とともに将来のまちづくりについて考える機会となることはとても重要なことであると考えます。

今後、情報発信をさらに強化し、市民をはじめ多くの関係者を巻き込みながら劇場を活用した文化芸術の発信とまちの賑わいづくりについて、粘り強い検討と確実な取り組みを進めていかれることを願います。

嘉穂劇場が多くの市民の期待に応え、また新たなエンターテインメントを発信する施設として、一日でも早く賑わいを取り戻す日が来ることを心待ちにしております。

参 考 資 料

(1) 諮問書
(2) 飯塚市文化施設活用検討委員会委員名簿
(3) 飯塚市文化施設活用検討委員会の審議経緯
(4) 嘉穂劇場に深く関わりのある方々へのヒアリング結果
(5) 嘉穂劇場の変遷

3 飯教文第 870 号
令和 4 年 3 月 23 日

飯塚市文化施設活用検討委員会委員長　様

飯塚市教育委員会

諮　問　書

飯塚市文化施設活用検討委員会規則（令和 4 年飯塚市教育委員会規則第 1 号）第 2 条の規定に基づき、貴委員会に意見を賜りたく下記のとおり諮問いたします。

記

1.　諮問内容

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること

(1) 嘉穂劇場の文化財としての価値を損なうことなく、地域経済の活性化に寄与する活用方策について

(2) 嘉穂劇場と飯塚市文化会館をはじめとする文化施設や周辺商業施設との連携による活用方針について

2. 諮問理由

国登録有形文化財である嘉穂劇場については、近年のコロナ禍の影響に伴い、令和 3 年 5 月に NPO 法人「嘉穂劇場」が解散し、同年 9 月に本市が NPO 法人から嘉穂劇場の建物と建物が建っている土地、嘉穂劇場に係る備品、その他保存資料等の贈与を受けたところです。

嘉穂劇場は、昭和 6(1931)年 2 月に木造 2 階建ての芝居小屋として再建され、升席や二本の花道、人力で動かす廻り舞台や奈落を備える全国でも有数の劇場として運営されて参りましたが、建築後 91 年が経過し、建物の老朽化が進む中、NPO 法人の解散により現在、閉館しておりますが、嘉穂劇場運営再開を望む地域住民等の声もあり市が所有し、リニューアルに向け準備を進めているところです。

このような状況を踏まえ、今後、嘉穂劇場を魅力ある施設として活用するには、これまでの芝居小屋としての利用に加え、周辺商業施設や文化施設との融和なども含めた、新しい発想を取り入れながら、文化財としての価値を損なうことなく地域経済の活性化にも寄与できる活用方策が必要であり、検討することとしておりますので、貴委員会でご審議いただきたく諮問するものです。

● 飯塚市文化施設活用検討委員会委員名簿

（敬称略　順不同）

	氏　　名	所属又は現職
委員長	竹　川　　克　幸	飯塚市文化財保存活用推進委員会委員 日本経済大学　教授
副委員長	河　　知　延	近畿大学産業理工学部　教授
委　員	徳　永　　髙　志	慶應義塾大学大学院　非常勤講師
委　員	瓜　生　　隆　弘	近畿大学九州短期大学　教授
委　員	田　中　　克　也	九州旅客鉄道株式会社　ＪＲ新飯塚駅駅長
委　員	志　村　　直　美	株式会社　ＪＴＢ福岡支店
委　員	長 曽 我 部　　徹	全国芝居小屋会議　事務局次長
委　員	榎　本　　二　郎	株式会社　Ｚｅｒｏ－Ｔｅｎ　代表取締役
委　員	福 丸　　奈 々 美	一般社団法人　飯塚青年会議所 まちづくり委員会委員
委　員	大　石　　悠　斗	近畿大学産業理工学部　学生
委　員	寺　田　　光　哉	近畿大学九州短期大学　学生
委　員	早　川　　紗　帆	九州工業大学情報工学部　学生
委　員	田　上　　稔	福岡県教育庁文化財保護課　課長技術補佐
委　員	眞　鍋　　孝　博	福岡県商工部観光局観光政策課　課長補佐
委　員	奥　田　　る　り	NPO 法人わいわいキッズいいづか

● 飯塚市文化施設活用検討委員会の審議経緯

回数	日　　程	主な内容
第1回	令和4年3月23日	・飯塚市文化施設活用検討委員会について ・嘉穂劇場概要紹介 ・現地及び周辺に立地する文化・商業施設の見学
第2回	令和4年5月23日	・検討委員会スケジュールの見直しについて ・嘉穂劇場の文化的価値について ・嘉穂劇場の活動実績について ・嘉穂劇場に深く関わりのある方々へのヒアリングについて ・意見交換
第3回	令和4年7月28日	・嘉穂劇場に深く関わりのある方々へのヒアリング結果について ・他の文化財施設の活用状況 ・嘉穂劇場の活用策について（グループ討議）
第4回	令和4年8月30日	・前回のグループ討議結果の報告 ・これからの嘉穂劇場が担う性格の整理とターゲットについて ・イイヅカコスモスコモンとの連携について ・嘉穂劇場の新たな活用を図るために求められる具体的な機能等について ・新たな嘉穂劇場が目指す姿について
第5回	令和4年9月30日	・嘉穂劇場と地域経済の活性化 ・中間答申について ・新たな嘉穂劇場が目指す姿について
第6回	令和4年11月21日	・今後の飯塚市文化施設活用検討委員会の運営について ・嘉穂劇場が地域経済の活性化に寄与する方策等について ・劇場再開までに取り組むこと（ソフト事業を中心に）
第7回	令和4年12月26日	・劇場再開までに取り組むこと（ソフト事業を中心に） ・嘉穂劇場の運営方法と市民参画について ・最終答申案の構成と答申案について
第8回	令和5年1月30日	・最終答申案の検討

嘉穂劇場に深く関わりのある方々へのヒアリング結果

１．ヒアリングの目的

石炭産業隆盛期に筑豊地域の娯楽の場として人々に愛されてきた嘉穂劇場を、これからも多くの人に愛される施設として保存しながらも積極的に活用していくにあたり、これまで嘉穂劇場の運営や利用に携わってこられた方々に、今後の嘉穂劇場はどうあるべきか、また嘉穂劇場に期待することなど伺い、今後、本検討委員会で新たな活用策を審議する際の参考資料とするもの。

２．ヒアリング調査の概要

(1)対象者

添付資料①のとおり

(2)期間

令和４年５月 30 日～令和４年７月８日

(3)ヒアリング内容

① これまでの嘉穂劇場との関わり
② 嘉穂劇場に対する『評価』、『思い』
③ 今後の嘉穂劇場に対する期待　　等

(4)調査方法

・文化課文化施設整備推進係の職員による訪問により、関係者への聞き取りを実施。
・ヒアリングは、ヒアリング対象者のそれぞれの立場、関係性を考慮し、自由な発言を誘導する形で実施。

(5)調査結果

・ヒアリング対象者の発言内容をカテゴライズして整理
・ヒアリングにおける主な意見は添付資料②のとおり

添付資料　①

● ヒアリング対象者

対象者選定の視点	対象者	備考
嘉穂劇場の運営（設備状況）の立場から	嘉穂劇場元スタッフ	専属の舞台演出担当者
	東洋アミューズ　代表	劇場貸館時の音響、照明担当
嘉穂劇場の運営支援の立場から	飯塚商工会議所　専務理事	
	飯塚高校　理事長	元 NPO 理事、商工会議所副会頭
嘉穂劇場前身中座との関わりから	㈱麻生　　会長	飯塚商工会議所会頭
嘉穂劇場の活用の立場から	飯塚文化連盟　名誉会長	劇場存続に奔走、建築図面の復元(S47)
	飯塚文化連盟　会長	嘉穂劇場の継続的支援
	野武士　代表	ステージ登壇者　定期的に嘉穂劇場利用
	マルシェ企画運営　代表	嘉穂劇場でマルシェ開催
	㈱トーン　取締役	イベント企画会社（Gotton Jam 開催　他）
	㈱ＮＯＴＥ　代表	イベント企画会社
	高文連（福岡県高等学校芸術・文化連盟）　理事長	（事務局）嘉穂高等学校
地元住民の立場から	東町東自治会長	郷土史研究家
	中田友文堂　代表	飯塚昭和通商店街　理事長
	学生服のタナカ　代表	嘉穂劇場隣接店舗
まちづくりの観点から	飯塚観光協会　事務局長	
	飯塚市商店街連合会 前会長	昭和通商店街店舗経営者
文化振興拠点の観点から	イイヅカコスモスコモン 館長 （飯塚教育文化振興事業団業務執行理事）	

嘉穂劇場に深く関わりのある方々へのヒアリング結果（主な意見）

Ⅰ　嘉穂劇場の評価

１　嘉穂劇場の評価

・嘉穂劇場は無二の劇場であり、桝席や花道などが存在する貴重な劇場である。演者や利用者は劇場の持つ「不便さ」に価値を見出し、利用しているという意見が目立った。
・また、嘉穂劇場は演者にとっても多くの有名な芸能人が舞台に立った思い入れのある場所であり、評価は高い。
・一方、地元においては嘉穂劇場の存在は当たり前であり、賑わい、騒音も日常のことであったが、これまであまり劇場と地元との関わりはなく、劇場はどちらかといえば敷居の高い存在であった。このため、地元でも劇場を残したいと思う者と不必要であると思う者がそれぞれ存在するようである。
・教育の観点からも、嘉穂劇場が貴重な経験を積むことができ、学びの場として有益な場所であったという意見がある一方で、高校文化祭のように、多くの学校が時間制限のある中で一堂に利用する際には、設備が現代的でなく控室なども少ないことから不便を感じていたようであった。
・海外の人々にとって、嘉穂劇場は非常にインパクトある施設として映っていたようで、大変喜ばれ、劇場で用意されていたコスプレ体験も非常に好評だったようである。
・料金については、高かったという回答がほとんどであったが、一方で劇場側の配慮により、無料で利用できたイベントもあったようである。
・嘉穂劇場は市民のシンボルになり得るもの、また飯塚市の魅力を形成する文化発信の場所として貴重であるが、その残し方は地域全体の活性化につながるものであるべきであるとの意見があった。

- ❖ 嘉穂劇場のような劇場はここにしかない。嘉穂劇場があるからこそ飯塚で文化的な活動ができるし、自分たちのような小さなイベント会社でも、有名な演者との出演交渉ができると考えている。
- ❖ 嘉穂劇場は、桝席や花道など使って通常のホールとは全く違う演出を考えることができ、また音響も一般的なホールと響きが異なるため、音響についても演者に喜ばれている。
- ❖ 世界の CM フェスティバルやマイクパフォーマンスなど企画したが、嘉穂劇場の力のある歴史的建物にふさわしい演者が会場に集まる気がしている。
- ❖ 桝席や桟敷席は、嘉穂劇場以外にはほとんど存在しない。正座する不便さにも価値があると考えている。

- 嘉穂劇場が個人経営の中で築いてきた役者とのつながりは、行政の運営になると難しくなるかもしれない。
- 嘉穂劇場は演者にとっても思い入れのある場所である。誰がステージに立ってきたかが重要なようで歴史のある場所であり、水害の際も多くの支援者によって復活しており、若いバンドマンにも人気のある劇場である。今でも演者から嘉穂劇場はいつから使えるのかの問い合わせがあっている。
- 嘉穂劇場は、文化ホールのような便利さはないが、便利さを求める演者はいない。現在の環境の中、不自由さを楽しんで演じる場所が嘉穂劇場である。
- 芸能界関係者からすると嘉穂劇場は素晴らしい財産であり、自分たちが当たり前に思っている以上にすごい劇場であると改めて感じたことを覚えている。
- 舞台機構がほとんど人力であることに感動して帰られた演者もいた。
- 劇場の舞台機構一つ一つに意味があり、建物自体が文化遺産であるが、劇場は見学の場所だけでなく、舞台（公演）があっての小屋である。
- 嘉穂劇場は小屋主との一体感を感じる場所であった。嘉穂劇場は、ここにしかない劇場である。

- 嘉穂劇場の活用といわれても、嘉穂劇場があまりに身近にありすぎてピンとこない。ただ、嘉穂劇場を通じて、地域の良さを発信できるのではないかと思っている。
- 座長大会の時には、お練りが商店街を回っていたが、その以外に商店街と嘉穂劇場との関わりはほとんどなかった。
- 嘉穂劇場を地域の文化財として残す必要はあると思うが、地域はあまりそのことに関心を払っていない。市が嘉穂劇場をどのように使っていこうとするのかに興味がある。
- 嘉穂劇場はこれまで地域の方々にとっては敷居が高かったのか、劇場と地域との変な距離感を感じていた。劇場側も地域に対して何かしようとすることも感じられなかった。今後、公共施設として管理していくのであれば、地域の人が利用しやすくするための「しかけ」を考えてほしい。
- 嘉穂劇場は自分が生まれる前から存在する劇場であり、存在は当たり前のこと。日常生活の中に存在する劇場であるため、確かに劇場に近い室内にいると、太鼓など響いていたが店舗にいると音がうるさいなどの感覚は全くなかった。賑わい、騒音も日常である。
- 地元でも劇場を残したいと思う者と不必要であると思う者がそれぞれ存在している。

- 教育に携わる者としても、嘉穂劇場が教育の場、生徒の発表の場として貴重な存在であると感じていた。
- 嘉穂劇場の歴史、そして建物の内部の環境そのものは、他の地区にはないもの。 嘉穂劇場からの発信は、学生によい刺激を与えてくれると同時に、海外からも高い評価を

得ていた。

- ❖ 照明等を吊り下げるバトンが竹製で古く、重量制限もあったことから、生徒等にはあまり好評ではなかった。
- ❖ 嘉穂劇場は利用料が高額であったため、演劇の会場として利用しようと考えても、大道具等の出し入れに裏方のスタッフを雇用したいが、スタッフの経費まで捻出することが厳しく、使いづらかった。
- ❖ 文化祭を運営する側としては、費用面と運営のしやすさから会場を選定する。嘉穂劇場は穴場ではあるが、文化ホールとして利用するにあたっては利用しづらい部分もある。

- ❖ 観光の視点から見て、嘉穂劇場は本市における貴重な資源。特にインバウンドの誘致において観光スポットになりうる。 台湾からの観光客には、コスプレ体験が大人気であった。
- ❖ 嘉穂劇場は海外からのお客様を案内しても大変喜ばれた。劇場でコスプレの衣装など用意していただいていたので、インスタで発信するなど嘉穂劇場を大変楽しんでいた。
- ❖ 嘉穂劇場を失くすのはもったいないと思う。嘉穂劇場は特に海外からのお客様にはとても印象深い建物である。
- ❖ 嘉穂劇場での公演は、劇場を見たくて参加する方が多かったように思う。特に台湾やアメリカなど、海外からの参加者には嘉穂劇場の公演は好評だった。

- ❖ イベントで使用するにはこれまでの使用料は高すぎた。特に参加費無料のイベントでは、嘉穂劇場での実施は厳しすぎた。金額が下がれば、高齢者の発表の場としても利用できるのではないか。
- ❖ 嘉穂劇場は利用料が高く、これまで学校でホール等を使用する時は安価なコスモスコモンとうまく使い分けていた。

- ❖ インスタ映えからすると、嘉穂劇場より八千代座のほうが映える。
- ❖ コスモスコモン建設の際、嘉穂劇場とのすみ分けを「嘉穂劇場はその存立の歴史と現状から、古典芸能・大衆芸能の専門劇場として、一方新設予定の市立文化ホールは、現代舞台文化に親しめるホールとして、つまり互いの施設は、車の両輪として飯塚市民の舞台文化を育み薦める場」としたが、この原則は今でも生きていると思っている。
- ❖ 嘉穂劇場は観光の観点もあるだろうが、飯塚市の文化の発信の場としてぜひ残してほしい施設である。
- ❖ 旧飯塚市で文化連合会が昭和 42 年に設立。その後の活動の中で、市内にある嘉穂劇場は文化財として後世に残さなければならない劇場として捉えていた。
- ❖ 「教育」と「医療」と「文化」は、飯塚市の競争力を高める要素と考える。また現在

の飯塚はそれらの分野でとても頑張っていると思うが、その中の「文化」において嘉穂劇場は起爆剤の一つとなり得る魅力を持っていると感じている。

❖ 歴史のあるまちか否かは市のまちづくりに大いに影響する。文化財、歴史はまちの魅力の一つになり得る。旧伝右衛門邸、嘉穂劇場、コスモスコモンの 3 つはまちの魅力を形成する建物である。

❖ 嘉穂劇場は市民のシンボルになりうるものであり､残していきたいという思いはある。しかしながら、多額のお金をつぎ込んで残すものではなく、賑わいの起爆剤となるようなお金のつぎ込み方、お金が回る仕組みを作っていく必要があると考える。

２　これまでの利用の方法

・通常の芝居鑑賞、音楽鑑賞以外で、若い世代も多く参加した音楽フェスや太鼓の演奏会などでは、桝席等で食事しながらの鑑賞が可能なイベントも開催された。また、劇場全体を使ってマルシェが開催されたこともあった。
・桝席では 2 枚の板を渡してテーブルつき 4 人掛けの桝席を用意することも可能であったようである。
・コロナ禍では、劇場を低額で貸し出し、様々なパフォーマンス会場として活用されていた。海外へのライブ配信も行われたようである。
・そのほか、婚活パーティやダンスコンテスト、結婚式でも活用されていた。

◆ 音楽フェス『GottonJam』では、食事をしながら音楽を聴いていた。桝席にはテーブルを用意し、4 人でひとマスを使用していた。座席には座布団を用意。

◆ かつて、「筑豊マルシェ」と題して、会場内に 100～130 ブースを用意し、嘉穂劇場の１，２階の桟敷や廊下まですべて使って屋内でマルシェを開催していた。また駐車場にはキッチンカーを配置していた。開催は、劇場の利用者のいない平日に実施していたが、劇場の配慮で会場は無償で借りていた。参加者は出店料 3,000 円とスタッフの参加人数に合わせて入場料も支払う。それらはすべて嘉穂劇場に寄付をしていた。

◆ かつて、嘉穂劇場で仮面婚活パーティの開催をお手伝いしたこともあった。男性と女性が廻り舞台を挟んで座り、スタッフが廻り舞台を回転させてお見合い相手を変えさせようとするもの。カップルが成立しなければ奈落に落ちるようなこともやっていた。

◆ そのほかダンスコンテストや結婚式も開催されていたように思う。

◆ コロナ禍で嘉穂劇場での芸術活動が困難となった時、嘉穂劇場を低額で貸し出す『夢舞台プロジェクト』を実施したが、その際、プロの演者もお忍びで嘉穂劇場のステージに立っていた。

- 東京から DJ が来て演奏したこともあった。彼らは演奏とロケーションのギャップを面白がって嘉穂劇場に来ているようだ。
- 令和 2 年 12 月に『ジャパニーズ　エルビス』をオンラインでライブ配信したところ、ロシアだけで 17 万回もの再生があった。海外の方には嘉穂劇場は非常にウケる。
- 嘉穂劇場見学者には、嘉穂劇場のお土産（手ぬぐい、駄菓子等）も用意し、販売していた。
- 桝席は 72 マスある。以前飯塚法人会から 1 マスに 2 枚ずつの板のテーブルをいただいたので、マスに板を渡し、1 マス 4 人掛けでセミナーなどを開催したこともあった。
- 座布団に座ることが難しい方がいらっしゃるのも理解している。以前、座椅子を用意したこともあったが、畳に跡がつくため途中でやめてしまった。
- 野武士（和太鼓）は、これまで嘉穂劇場をホームグランドとして利用させてもらっていた。嘉穂劇場での演奏を DVD でも海外に発信している。外国人には、嘉穂劇場の建物自体が非常に興味深いようである。
- これまで「野武士」の公演は、福岡では嘉穂劇場でしかやらなかった。演奏中も飲食可能であり、昔ながらの粋な文化をそのまま再現できた劇場をこれからもぜひ残してほしいと思う。

Ⅱ これからの劇場に期待すること

1　設備に関すること

・駐車場に関しては、現在の駐車場は狭く、中途半端な大きさであるため、広場など他の用途に使ったほうがいいのではないかという意見とともに、周辺の民間の駐車場を含めて嘉穂劇場周辺の駐車場の場所についてわかりやすい説明が欲しいという意見が多かった。

一方で、バスツアーの観光客を誘致するためには、観光客の乗降場所と駐車スペースを確保しなければならず、周辺の土地の利用についての提案もあった。

・嘉穂劇場の桝席や桟敷席などの構造は、不便さ、使いにくさがあるものの、これが嘉穂劇場の特徴であり、このままの形で残してほしいという意見がほとんどであった。ただし、桟敷席がフラットにもなれば、さらに活用の範囲が広がるのではないかという意見もあった。

・これから劇場を活用していくにあたっては、機材のデジタル化や映像による演出が可能となるような設備の導入を求める意見や、昭和 40 年代に整備された楽屋の改修を求める意見があった。

- イベント時には、駐車場でなく広場が欲しい。
- 嘉穂劇場の駐車場は中途半端であり、コスモスコモンに駐車して嘉穂劇場まで歩いてもらうようにしてもいいのではないか。飯塚市が周辺を含めて嘉穂劇場の活用構想を示せば、周辺の店舗も変わっていくのではないか。店舗が変われば、歩いている途中で購入する者も出てくるかもしれない。
- イベントで活用するとしても駐車場の問題がある。現在の民間を含めての周辺の駐車場の場所もわかりにくい。
- 現在の駐車場をほかの用途で活用できないかとも思う。ただし、駐車場はどうしても必要であるが、河川敷は天候に左右され、使いづらい。嘉穂劇場をバスツアーで訪れる際は、観光客の乗降場所とバスの駐車スペースがなければ、バスツアーの観光客を誘致できない。
- 嘉穂劇場の活用に際しては駐車場の確保が重要である。河川敷の活用も検討すべきか。嘉穂劇場周辺にも空き家や廃業予定の土地がある。それらの土地を活用すれば、嘉穂劇場への観光バスでのアクセスもしやすくなるのではないかと思っている。
- 嘉穂劇場周辺には民間の駐車場も多いが、わかりにくいと聞く。地域全体で協力し合えれば民間もまとまり、利用しやすくなるかもしれない。
- 嘉穂劇場の駐車場は、駐車場として使用するには狭かった。
- イベントに参加したい人は、近くに駐車場がないからと言って来ないことはなく、どこに停めてでも来る。長時間のイベントなどは駐車場の割引など用意していただける

と使いやすい。

- （コスモスコモンの展示ホールはほとんど利用が詰まっており、なかなか利用できない。）嘉穂劇場の座席をフラットにしたら、利用頻度も高くなるのではないか。
- 観光には目玉、「看板」が必要。嘉穂劇場の桝席も、桝席を体験したいために人はやってくる。桝席は残していきたいものである。
- コモンと嘉穂劇場を併用する際には、例えば、バリアフリーはコモンに任せて、桟敷を生かした活用をする際は嘉穂劇場というようなすみ分けを考えてはどうか。多くの人々に開かれた施設であるほうがよく、一定の配慮は必要であると考えるが、嘉穂劇場は桝席、桟敷席に座るということが意味あることであり、飯塚高校の生徒からも、嘉穂劇場の環境から学ぶこと（桝席での譲り合いや声掛けなど）が多かったと聞いている。
- 嘉穂劇場はこのままの形で残してほしいと思う。不便さ、使いにくさが嘉穂劇場のいいところだと思っている。この状態が海外の方にはウケているようである。

- かつてのように、正面の櫓で触れ太鼓をたたくことができたらよいと思う。しかし、櫓に上がるには天井裏に入らなければならないので、別に通路を設ける必要がある。
- 今後の機材として、2 階後方から投影できるプロジェクターの設置を望む。映像を使う演出が多く、必要性を感じる。
- これからの嘉穂劇場の活用を考えるとき、ネット環境の整備は必要であると感じる。
- 嘉穂劇場の靴の管理はどうにかならないものか。いつもビニール袋のごみが山のようにでている。
- 劇場が立地する場所柄か、劇場を使用しているときに音漏れがうるさいなどの苦情を地域から受けた記憶はないが、逆に雨音がひどかったり、救急車のサイレンがうるさいなど外の音が劇場内に入り込み、興ざめとなる場合があった。
- 劇場そのものは水害後の復旧できれいになったが、楽屋等は以前のままであり、このままでいいのかと思う。改修が必要なのではないか。

２　料金に関すること

・料金については、高かったという意見がほとんどであった。しかしながら、安くなれば利用が雑になり、質の高いアーティストを呼ぶことが難しくなるのではないかという懸念も示された。
・また市民が利用しやすい劇場であるよう、営利と非営利とで料金設定を分けるなどの工夫が必要であるとの意見が多く聞かれた。

✧ 嘉穂劇場の今後の利用料について考える。質の良いアーティストを呼ぶためには、ある程度の料金設定をしたほうがいいのではないかと思う。安すぎると多くの人々が利用しようとし、劇場の確保が困難になる。
✧ 営利、非営利等で料金設定を分けて考えるほうがいいのではないか。
✧ 今後、行政で嘉穂劇場の利用料を設定することになるのだろうが、コモンの利用料と差がつくのはいいと思うが、これまでの利用料よりもう少し安くなれば使いやすくなるのではないかと思う。
✧ 嘉穂劇場はこれまで使用料が高く利用できなかったが、非営利活動などの際には減免するなどして、地域の活性化につながる活動を支援する劇場であってほしい。
✧ 利用料で折り合えば利用も考えられる。一般の利用と学生の利用とは利用料金に差をつけるなど考えてほしい。
✧ 今後、利用料金が検討されるであろうが、料金が安くなると利用が雑になるのではないかと懸念する。付加価値を付けた料金設定であってもいいのではないか。
✧ 子供達には使いやすく、芸能人には格式高くなど、区分があってもいいのではないかと思う。

３　観光の視点・文化財の視点からの意見

・嘉穂劇場は海外の観光客を含めて観光のリソースとなり得るという意見の一方で、現状のままでは爆発的な人気を生むことは難しく、観光の要素にはなりえないという意見も多く聞かれた。嘉穂劇場で提供できるコンテンツのブラッシュアップや劇場周辺とのコラボレーションの重要性を指摘する声が聞かれた。

☆ 文化資産として残すよりも、観光のリソースとして残すものではないかと考える。そのためには劇場周辺部も含めて活用する方策を考えるべきではないか。
☆ このままの形であれば爆発的な人気を生むことは難しく、飯塚市の観光の要素にはなりづらいと感じる。視点を変えた新しい要素を加えなければ、観光スポットにはならないのではないか。
☆ 現在、国内において徐々に外国人観光客を受け入れ始めているが、本市においてもインバウンドを考えるときには台湾からスタートする可能性がある。そのためにも、言語や表記を外国人仕様にしていかなければならない。
☆ 歌舞伎は風情のある嘉穂劇場で見たいと思う観光客は多い。ただし、誰が来るかが重要である。歌舞伎愛好者は世代が広い。人はただ「小屋」を見には来ない。そこで体験

できるコンテンツが重要である。

☆ 海外から人を呼び込むのに嘉穂劇場は身近で気軽に訪れ、文化に触れることができる施設としてもっと売り出した方が良い。観光資源としても必要な施設である。

☆ 嘉穂劇場は、飯塚市を知っていただくうえで「地の利」が良いと感じる。周辺には千鳥屋や長崎街道の通りがあり、飲み屋街にも歴史がある。

☆ 嘉穂劇場は中心市街地に所在しているが、嘉穂劇場を含め以前は「面」で存在していた観光スポットは、現在「線」でしか存在していない。その点は残念である。

☆ 嘉穂劇場を観光資源として利用することには難しさがあると思うが、文化財として残してほしいと思っている。

４　まちづくりに関すること

・嘉穂劇場単体で考えるのでなく、周辺部とが一体となって、まちで時間を過ごすことのできる空間づくり、賑わいづくりを求める意見が複数聞かれた。また、嘉穂劇場の特異性を生かして、嘉穂劇場を核として文化を大切にする飯塚に愛着を持つ人が集まってくるまちづくりを進める必要があるとの意見があった。

◎ 嘉穂劇場の周りに店舗（食事処や土産物店等）がない（少ない）のがネックとのアンケートの回答あり。周辺の町も盛り上がる企画が必要。

◎ 人流が増加することによって、空き店舗もお客様のニーズに合った店舗に変化していかなければならない。

◎ 嘉穂劇場の廻りは飲み屋街があるが、新宿の末広亭の周りも飲食店が立ち並んでいる。梅田花月の周りでも飲食ができる。興行など見た後に飲食ができ、楽しめる、そんな大人の遊び方ができる空間であってほしい。 嘉穂劇場とその周辺部分が一緒になって、時間を過ごすことのできるまちになってほしい。

◎ 劇場単体ではなく、周辺とタイアップしての整備が必要と思っている。例えば、 嘉穂劇場の裏口は、昭和通りにつながっている。その裏口をうまく活用すれば商店街との回遊性が増し、賑わいづくりにつながるのではないか。

◎ 劇場を保存するのは簡単だが、継続して活用していくのは難しいことと思う。町内も世帯数が減少傾向にあり、隣組が機能しない場所も出てきた。町内としても、街が元気になるような取り組みを期待する。

◎ 嘉穂劇場がわかりにくい。劇場を訪ねようとする人が、場所がわからずよく尋ねられていた。

◎ 文化的な面白みのないところには人は集積しない。文化を大事にしているまちであることを飯塚市は発信していくべき。

◎ 何をターゲットにして人を呼び込むか。飯塚への愛着を持つ人が集まる取り組みが必要である。商業や利便性、新しさを求めるのであれば、人は福岡市に流れていく。でも福岡市には嘉穂劇場はない。嘉穂劇場を中心に歴史や文化の優先順位を高くしたまちになれば、それを求めてくる人が集まってくる可能性はあると思う。

◎ 利便性だけ追求すれは福岡市に負けてしまう。嘉穂劇場にしかない『モノ』で、嘉穂劇場でしかできない『モノ』で人を呼びこむことができる。

◎ 明るい街には笑いがあり、若者が育つまちは魅力的である。さらに高齢者が笑っているまちであってほしい。その場所として嘉穂劇場が使われることを期待したい。

5　その他の提案

・今後の新たな活用策として、大物の役者の芝居が定期的にあるようになれば、嘉穂劇場の知名度も上がるのではないかという提案の一方で、地域住民が利用できるよう、特に子供たちが嘉穂劇場を使う方策を考えることが大切との意見が多く聞かれた。

・日本文化に関心の高い海外の方々に対しては、海外の映画やプロモーション等のロケ地としても活用されるのではないかという意見もあった。

・運営方法については、大手事業所の協力を得ることについての提案や、今後の維持運営に対して、地域住民が応援していく体制の整備が必要性であるとの意見もあった。

　さらにお土産の準備、特に海外の方に喜ばれる T シャツ等の製作とともに、飯塚市の御土産を販売するアンテナショップを劇場内に設置する意見なども出された。

・その他、嘉穂劇場とコスモスコモンのすみ分けに関する整理や、嘉穂劇場再開までのプロセスに対する意見もあった。

★ 年に数回でもいいので、大物の役者が嘉穂劇場に来てくれれば影響が大きい。嘉穂劇場を知る役者もいる。嘉穂劇場の名前をうまく使って知名度を上げて行くことが重要。

★ 浅草の軽演劇の劇場では旅役者の公演に行列ができ、また特に若い女性が足を運んでいるというニュースを見た。女性が軽演劇に魅力を感じているところに、嘉穂劇場活用のヒントがあるのではないかと思う。

★ 嘉穂劇場はなんとなく敷居が高い。スターの公演や古典に限らず、市民が気軽に劇場に問い合わせができ、利用できるようになるといいのではないか。

★ 嘉穂劇場の今後の活用策として、小学生に飯塚の歴史を嘉穂劇場で学ぶようにしてはどうか。子供たちにも郷土の歴史を学んでもらうことは重要であり、また、子供たちも

出かけて学ぶことを喜んでくれると思う。

★ 嘉穂劇場を子供山笠の表彰式で使うなど、子供たちに使ってもらうことを考えてはどうか。

★ 嘉穂劇場を発表の場を求めている人に開放してほしい。市内の子供たちが発表の場として嘉穂劇場に立てば思い出ともなる。

★ 昔の食事を提供したりするのも面白い。また、楽屋に宿泊するのはどうか。

★ 全く異なった使い方の案として、例えば楽屋もあるので、シェアオフィスとして使うのはどうか。また、嘉穂劇場の聖地巡礼的な使い方もある（例えば「椎名林檎がコンサートした劇場」ということをアピール）。組み合わせの意外性が人の心を動かす。

★ 今後の嘉穂劇場の新たな活用策として、本市はサニーベールからの子供たちを受け入れているが、海外の子供たちは日本語の文字や漢字の入った T シャツなどのお土産を好んでいる。かつて嘉穂劇場も名前の入った T シャツを販売していた。海外から来た方々へのお土産を嘉穂劇場で販売してはどうか。

★ 飯塚土産のアンテナショップとして劇場を活用するほか、先日本庁の多目的ホールで開催したようなふるさと納税返礼品の販売イベントを嘉穂劇場で実施してはどうか。

★ 地元の人の中でも嘉穂劇場に入ったことのない人は結構いるのではないか。嘉穂劇場をもっと身近な施設として利用してもらうことが大切なのではないか。そのためには、いろいろなイベントの会場として利用する方法を検討する必要があるのではないか。

★ ハリウッドからも映画のロケ地として関心を持たれている。『TOKYO VICE』は全編すべて日本ロケで描くドラマだが、ハリウッドに限らず海外ではサムライや忍者など日本文化に関心が高く、嘉穂劇場はロケ地として十分に評価される劇場であると考える。

★ これからの嘉穂劇場は、海外を含め、プロモーションやロケ地としても十分に価値ある劇場だと思う。併せて、嘉穂劇場は成人式会場など、様々な使い方が考えられる劇場ではないか。

★ 嘉穂劇場のネーミングライツなど考えてはどうか。安定的な事業費の確保が可能となる。また大手のイベント会社の運営協力も検討できないだろうか。

★ お笑いライブはなかなか地方都市では楽しめていないイメージがある。大手の事業所が定期的に嘉穂劇場を使ってくれる仕組みがあるといいのではないかと思う。

★ 全国的に名の知れた事業者が嘉穂劇場の運営をするなどすれば、地域経済の活性化のノウハウも持ち合わせていると思われ、力を貸してくれるのではないか。

★ 劇場を文化財のハコモノとして維持・保存するだけでは限界がある。興行を行い、あわせて見学もできることに意味がある。壊さずお金を稼ぐ仕組みを作るべき。街並みを作ることも大切。その際にはお土産と飲食が必要。

★ これまで嘉穂劇場と地元の人たちとのつながりの歴史は残念ながらなかったが、今後施設を維持していくのであれば地域の人がバックアップする体制が必要だと思う。

★ コスモスコモンは市民の文化に触れるすそ野を広げる役割をもつ施設であり、一方、嘉穂劇場は他にはない飯塚の「とんがった」部分を引き出す施設として考えるのが良いのではないか。

★ 嘉穂劇場とコスモスコモンは近接しているのがよい。今後両者の特色を生かしてイベントが実施できる。嘉穂劇場は使い方次第である。

★ 高文連の大会は１年前にはスケジュールを決定する。そのスケジュールに対応できる施設であってほしい。

★ 一度途絶えてしまうと、復活するまでにはかなりの時間が必要である。嘉穂劇場も一旦人々の気持ちが離れてしまうと、以前のような利用者の獲得も難しくなるのではないか。利用者の視点で考えていく必要がある。

嘉穂劇場の変遷　　嘉穂劇場　　1931(昭和 6)年 2 月 6 日　開場

第 1 期 嘉穂劇場建設後の全盛期（1931(昭和 6)年～1955(昭和 30)年頃）

全国的に炭鉱は全盛期を迎え、1940(昭和 15)年には史上最大の出炭量を記録する。この年、嘉穂劇場を再建した伊藤隆氏が病に倒れ、妻・姉妹による経営に移ってゆく。翌年には第 2 次大戦が始まり、劇場運営には制約が多かったが、当時の筑豊には多くの外国人労働者がおり、壊滅的な空襲に遭うことなく、興行を続けている。

第 2 期 劇場運営の下降期（1955(昭和 30)年頃～1970(昭和 45)年頃）

1955(昭和 30)年台のエネルギー政策の転換により、炭鉱の閉山が相次ぎ、1961(昭和 36)年には 160 鉱、1967(昭和 42)年には 43 鉱まで減った。筑豊地区には失業者があふれ、1960(昭和 35)年には 2 万 2000 人を超えた。それに伴い、劇場の運営も下降線をたどった。この時期に筑豊の多くの劇場は閉鎖や解体される。1964(昭和 39)年に伊藤英子氏を中心に従姉妹小金丸兄妹での運営に移る。

第 3 期 時代の変化に伴う劇場の改変期（1970(昭和 45)年頃～1985(昭和 60)年頃）

全国的に残された芝居小屋は数えるほどとなり、閉鎖された筑豊の芝居小屋もほぼ姿を消す。長年の使用により痛みの激しい楽屋や売店棟などの改築や、建物を維持するための補修に加え、消防法の改正など古い木造の建物には厳しい時代となる。1974(昭和 49)年演劇学会が飯塚で開催され関係者の注目を浴び、嘉穂劇場の存続がたびたび報道されるようになる。1979(昭和 54)年にかつて九州で活躍した大衆演劇の劇団座長による全国座長大会の開催が話題になるなど、各地でも芝居小屋の復活運動が始まる。

第 4 期 劇場の転換期（1985(昭和 60)年頃～2004(平成 16)年頃）

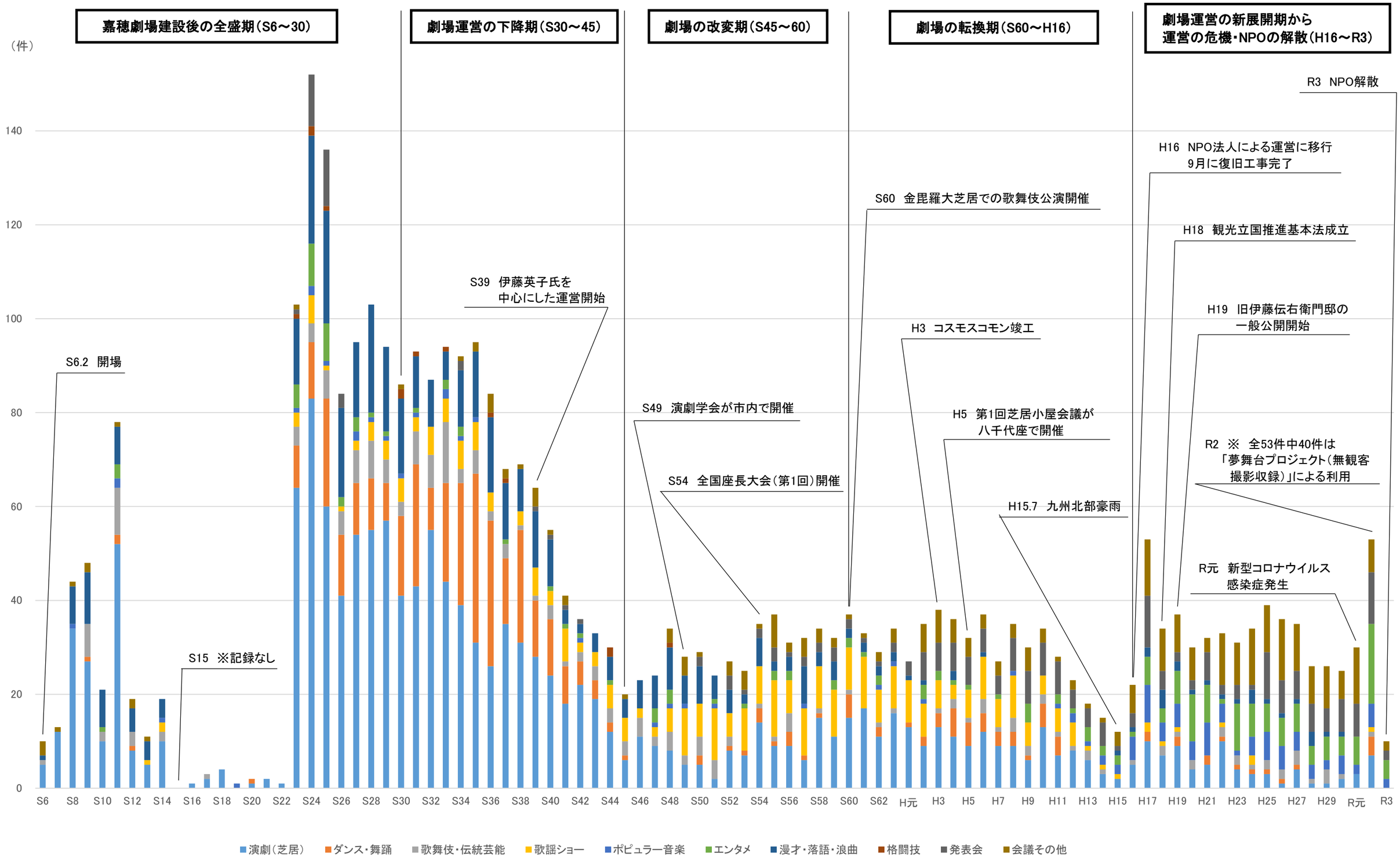
1985(昭和 60)年金毘羅大芝居での歌舞伎公演開催をはじめ、この頃より康楽館（秋田県）、内子座（愛媛県）、八千代座（熊本県）など相次いで修復工事を終え再開する。1993(平成 5)年八千代座の復興運動に携わった八千代座桟敷会の呼びかけにより全国の芝居小屋関係者が集まり芝居小屋会議を八千代座で開催するなど芝居小屋の活用を考える時期を迎える。なお、飯塚市文化会館（飯塚コスモスコモン）が 1991(平成 3) 年 12 月に竣工。嘉穂劇場は 2001(平成 13)年、築 70 年を迎え、地盤も悪く、奈落や床下の湿度が高いこともあり、近いうちに大規模な改修工事を必要としていた。2003(平成 15)年 7 月の福岡県北部豪雨により壊滅的な被害を受ける中、芸能関係者や一般市民からの大きな支援・協力により、2004(平成 16)年 9 月に復旧工事が完了。

なお、2004(平成 16)年からは NPO 法人嘉穂劇場により運営される。

第 5 期 劇場運営の新展開期から運営の危機・NPO 解散
（2004(平成 16)年頃～2021(令和 3)年）

2006(平成 18)年 12 月に「観光立国推進基本法」が成立し、2008(平成 20)年 10 月には「観光庁」が発足、訪日外国人受入の促進や国際会議の誘致・促進、宿泊を伴う滞在型観

光のための観光圏の整備の促進等に取り組み、観光立国の実現を目指す取り組みがスタートした。国内においては、2008(平成 20)年のリーマンショックや 2011（平成 23）年の東日本大震災時には一時的な落ち込みはあるものの、基本的には順調に訪日外客数を伸ばしていた。一方、飯塚市においては 2007(平成 19)年から旧伊藤伝右衛門邸一般公開を契機に観光入込客数は 200 万人を超えたが、それ以降ほぼ横ばいが続き、2010(平成 22)年からは減少に転じている。このような中で、国内の、特に福岡市への訪日外客をターゲットに「忍者体験ツアー」など嘉穂劇場に誘導する事業を旅行会社とともに企画するなど、あらたな劇場利用者の獲得に取り組んだ。これらの活動が功を奏し始めた矢先、2019(令和元)年末に新たに発生した新型コロナウイルス感染症により、興行や各種イベントは軒並み中止となり、老朽化した施設の改修を含め運営の先行きが見通せない中で 2021(令和 3)年 5 月、NPO 法人嘉穂劇場は経営を断念し、解散に至る。

参考資料：飯塚市登録文化財　嘉穂劇場復旧工事報告書
特定非営利活動法人　嘉穂劇場（平成 17 年 3 月）

嘉穂劇場　年別・ジャンル別　興行（公演）件数状況